

『ブラウン神父の童心』

G. K. チェスタトン／創元推理文庫

『ブラウン神父の知恵』

G. K. チェスタトン／創元推理文庫

『ブラウン神父の不信』

G. K. チェスタトン／創元推理文庫

『ブラウン神父の秘密』

G. K. チェスタトン／創元推理文庫

『ブラウン神父の醜聞』

G. K. チェスタトン／創元推理文庫

『The Complete Father Brown』

G. K. Chesterton / Penguin Books

まず、少なくともこの1年、読書らしい読書をしていなかったことを白状します。そこで、学生のとて読んだ本からの紹介です。

ブラウン神父シリーズは、シャーロックホームズとほぼ同時代、ロンドンとその周辺を舞台とする推理小説。奇想天外なトリックと機知に富んだ内容は、シャーロックホームズものと双璧をなすと言われています。

賢い人間は木の葉を森に隠す。森が無い場合は自分で森を作る。では死体を隠したいと思う者はどうするだろうか（チェスタトン）

皆さんは、このような引用をどこかで耳にされたことがあるかもしれません。「折れた剣」（童心）の中で使われている一節です。本稿ではタイトルで掲げた、情景を思い浮かべる面白さと難しさについて、自らの体験を通して本シリーズを紹介したいと思います。

以下は「大法律家の鏡」（秘密）からの引用ですが、この情景が容易に思い浮かびますか？

（庭のイルミネーションが趣味の法律家の屋敷で、一同が前庭に出たところの描写。時間は日没後）

警部があとをついて行ってみると、生垣のかげの奇妙な階段は、暗く寂しい庭の上につき出た半壊の橋のような構造物に通じていた。その構造物は、ちょうど建物の角をまわる具合に築かれていて、赤い灯、青い灯のちかちかする裏庭を眼下に見晴らせるようになっていた。どうやら、芝生の上に張り出した^{せりもち}迫持を利用して展望台のようなものをこしらえようという着想が、工事なかばで放棄されたものらしかった。

英国に住んだことのある人なら容易に分かるのかもしれませんが、行ったこともない私には全く想像が付きませんでした。挿絵などは一切ないので…。そもそも、「前庭」からして私にはピンと来ません。そこで先ず考えたことは、映像作品を探してみることです。1974年にイギリスでテレビドラマ「Father Brown」として13話放送されていることが分かり、DVDも出ているのでさっそく観てみました。確かに情景は分かりますが、今度は思い浮かべたイメージと違いすぎるのでそのギャップに悩んでしまいました。主演のケネス・モアのイメージも創元推理文庫のカバーに描かれているブラウン神父のイメージと全然違うし、そもそも、小説で読んだときの面白さが全然感じられなかったんです。結局、どうしても情景を見ておきたい部分だけ観て、DVDを観るのは止めてしまいます。2013年にもBBCでドラマが放送されてDVD化されているそうなので、こちらは少し期待しています。

次に始めたのが、味のある中村保男の訳と、原文を読み比べてみることでした。内容は分かっているので、分からない単語が多少あっても気にしません。情景の話とは少し離れますが、こちらのほうは読んだ実感が増し、実りある結果になりました。例えば、原文では意外とシンプルな表現になっていることに気づかされます。

「手早いやつ」（醜聞）における一文

問題の、人目につきやすいふたりの人物がこのホテルに足を踏み入れて、いあわせた人たちすべての注目を浴びた時刻よりも三十分早く、やはりふたり連れ、これはいかにも目立たない人物が同じホテルにはいって、だれの注目もひかなかった。

Half an hour before those two conspicuous figures entered the hotel, and were noticed by anybody, two other very inconspicuous figures had also entered it, and been noticed by nobody.

先に到着した二人とは、私服の警部と、僧服を着たブラウン神父のこと。この一文は、「だれの注目もひかなかった」の表現が面白いのでよく覚えていました。英語だと意外と自然な（おそらく自然な）、表現になるんですね。

時代や文化的な違いこそあれ、現代の日本でも、というより長岡でも、似たような体験ができるのが以下です。

「狂った形」（童心）の出だしの部分から

ロンドンから北に走る大路には、ずっと田舎^{いなか}の奥深くまでつづいているものがある。こういう道路は、町並みがまばらになり、家々が間遠^{まどお}になっているのに、その道筋だけはいつまでも通っているという、いわば街頭^{ほけもの}の化物である。一かたまりの店があるかと思えば、つぎには柵をめぐらした畑が、馬小屋に付属した小牧場があり、その隣には有名な宿屋が立ち、またそのつぎには菜園か苗木の栽培場その隣は個人の大邸宅であり、そのおつぎはまた畑、それからまた宿屋……といったぐあいなのである。

Certain of the great street roads going north out of London continue far into the country a sort of attenuated and interrupted spectre of a street, with great gaps in the building, but preserving the line. Here will be a group of shops, followed by a fenced field or paddock, and then a famous public house, and then perhaps a market garden or a nursery garden, and then one large private house, and then another field and another inn, and so on.

前半の巧みな訳文と、「柵をめぐらした畑」や「馬小屋に付属した小牧場」、「苗木の栽培場」などの原文での表現に納得させられます。

最後は、「グラス氏の失踪」(知恵)から、原文を読む前から想像ができてしまった一節です。

(トッドハンターという青年の婚約者がハンターの部屋のドア越しに「二つか三つかだ、ミスター・グラス」などの争うような声を聞いたにもかかわらず、ドアを開けるとグラス氏が居なくなっていた事件。神父による謎解きの部分)

[ネタバレ注意]

「実際のところこのかたは、こう言っていたんでしょ。 — 《ワン、ツー、スリー、ミスッタぞ、グラスを一つ (一個おとしたぞ)、ワン、ツー、またミスッタぞ、グラス》とこんなふうにな」

“What he really said was: ‘One, two and three — missed a glass; one, two — missed a glass.’ And so on.”

執筆者紹介

鈴木 泉

情報・経営システム工学専攻助教。専門領域は、知能処理、画像認識。

【書名】 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『ブラウン神父の童心』 G. K. Chesterton 著 中村保男訳 創元社（創元推理文庫）
1982年 713円

『ブラウン神父の知恵』 G. K. Chesterton 著 中村保男訳 創元社（創元推理文庫）
1982年 648円

『ブラウン神父の不信』 G. K. Chesterton 著 中村保男訳 創元社（創元推理文庫）
1982年 713円

『ブラウン神父の秘密』 G. K. Chesterton 著 中村保男訳 創元社（創元推理文庫）
1982年 648円

『ブラウン神父の醜聞』 G. K. Chesterton 著 中村保男訳 創元社（創元推理文庫）
1982年 626円

『The Complete Father Brown』 G. K. Chesterton 著 Penguin Books 1987年 3,197円

【DVD】『Father Brown』 BBC

ブックガイド目次へ